



国立環境研究所からの情報提供 (主に10月以降のA-PLATの更新・追加情報)

国立環境研究所 気候変動適応センター 浅野絵美
(asano.emi@nies.go.jp)

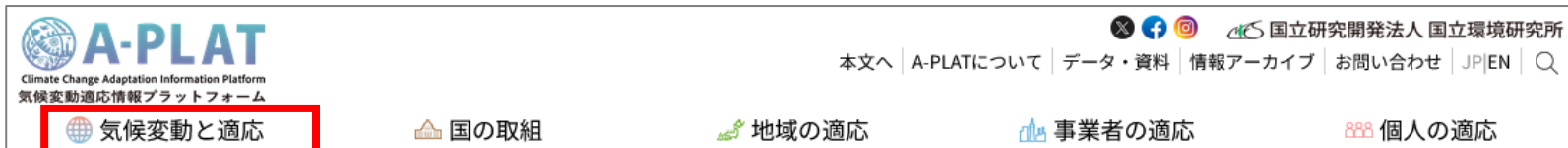


本日の話題提供

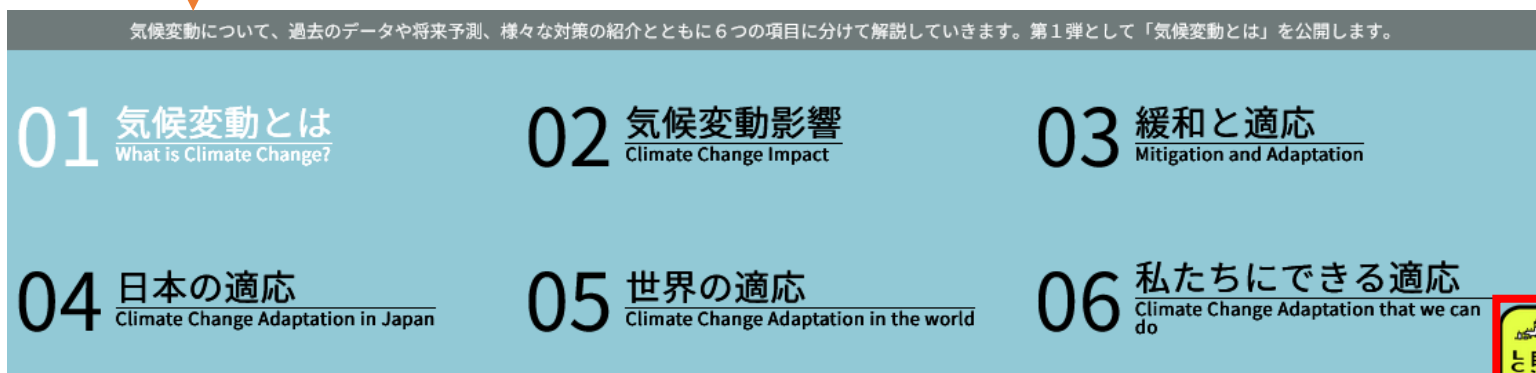
1. A-PLAT 一部リニューアル
2. 環境学習・普及啓発関連
3. 各種イベント報告・講演資料等公開
4. 生き物の分布推定ツール オープンSDM

The screenshot shows the A-PLAT website homepage. At the top left is the A-PLAT logo with the text "Climate Change Adaptation Information Platform" and "気候変動適応情報プラットフォーム". To the right are social media icons and the text "国立研究開発法人 国立環境研究所". Below this is a navigation bar with links: "本文へ", "A-PLATについて", "データ・資料", "情報アーカイブ", "お問い合わせ", "JPI|EN", and a search icon. A secondary navigation bar includes "気候変動と適応", "国の取組", "地域の適応", "事業者の適応", and "個人の適応". The main content area features a large banner with the title "気候変動と適応" and "Climate Change and Adaptation". It includes a world map and a map of Japan. Text on the left states: "世界の年平均気温 過去100年あたりで 0.76°C 上昇 ※2024年現在". Text on the right states: "日本の年平均気温 過去100年あたりで 1.35°C 上昇 ※2024年現在". A vertical line separates the two statistics. In the bottom right corner, there is a yellow box with the text "自治体の方" and "L C A C". At the very bottom, a small line of text reads: "気候変動について、過去のデータや将来予測、様々な対策の紹介とともに6つの項目に分けて解説していきます。第1弾として「気候変動とは」を公開します。"

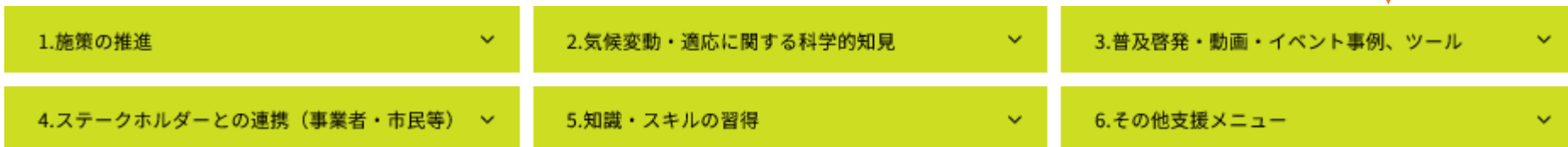
1. A-PLAT一部リニューアル



<新規> 解説ページの作成



<改善> 自治体/LCCACの方向けページの新設



第一階層で自治体・LCCAC関連の情報が概観できるよう工夫

1. A-PLAT一部リニューアル：気候変動の将来予測WebGIS

<改善>

従前頂いたご意見等を元に、マップ・グラフをより使いやすく

全国に戻る 表示地域変更 **ピン表示** 全画面表示 画面分割: ×1 位置を同期

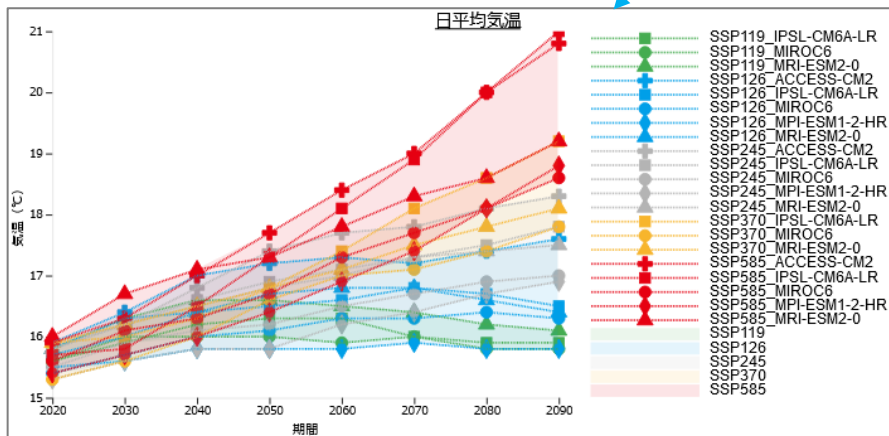
マップ
グラフ
関連情報

表示項目	説明
1. 分野	気候
2. 分類	予測データ
3. データセット	NIES2020データ
4. 気候・影響指標	日平均気温
5. 気候モデル	MIROC6
6. 社会経済・排出シナリオ	SSP126
7. 対象期間	2020年 (2010-2030)
8. 対象月	
9. 絶対値/相対値	絶対値
10. 透過度	20%

格子間隔 = 約 1 km

地図情報表示 説明

- 参照情報 (地理院タイトル)
 - データセット: 数値地図25000 (土地条件)
 - 透過度: 20%
- 参照情報 (国土数値情報)
 - データセット: 水域
 - 透過度: 20%
- 参照情報 (総務省統計局)
 - データセット: 人口総数 (2015年)
 - 透過度: 20%
- 背景地図
 - データセット: 白地図
- 都道府県抽出
 - はい いいえ 設定
- 市区町村界表示
 - 表示 非表示 設定



シナリオ範囲	SSP119	SSP126	SSP245	SSP370	SSP585
IPSL-CM6A-LR	✓	✓	✓	✓	✓
MIROC6	✓	✓	✓	✓	✓
MRI-ESM2-0	✓	✓	✓	✓	✓
ACCESS-CM2	✓	✓	✓	✓	✓
MPI-ESM1-2-HR	✓	✓	✓	✓	✓

2. 環境学習・普及啓発関連



<事例追加> 小学校・高校・高専での実際の活用事例をご紹介

- スタートは現在、ゴールは数十年後の未来
- CO₂の放出量を抑えながら（緩和）、温暖化した環境の中でよりよく生活できるように工夫（適応）してゴールを目指す。



・2024年度の貸出希望も受付中
(利用者の送料負担軽減に繋がる改善案検討中)

・自主制作される場合のai/pdfファイルもご提供

国立環境研究所 市民調査員と連携した生物季節モニタリング



- ・順調に参加者が増加。今年度500人を超え、全都道府県をカバー。
- ・企業との連携により、一般向け調査マニュアルを公開。

3.各種イベント報告・講演資料等の公開



第4回 適応プラットフォーム国際会議 (The 4th International Climate Change Adaptation Platforms Meeting)

開催日：2023年12月15日 (金)

<https://adaptation-platform.nies.go.jp/archive/conference/2023/1215/index.html>

海外の気候変動適応プラットフォーム運営者からの発表資料 (韓国、フィリピン、台湾、カナダ、EU) や国際的な組織の活動報告を掲載

ClimateData.ca - Information Portal

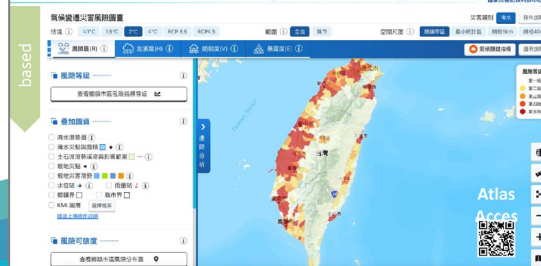
ONLINE SERVICE DELIVERY

- High resolution climate data
- Temperature and precipitation variables and climate indices
- Custom tools to analyze and extract data
- Sector specific modules
- Learning Zone



カナダ

Risk atlas allowing map overlay



台湾



令和5年度 気候変動適応の研究会 シンポジウム・分科会

開催日：2023年12月21日 (木)

<https://adaptation-platform.nies.go.jp/archive/conference/2023/1221/index.html>

国の研究機関の専門家から解説があった最新の気候変動適応に係るトピック等の資料を掲載

気候変動適応の研究会シンポジウム
2023年 12月21日 @秋葉原UDXカンファレンス

農研機構 農研機構

農業分野の影響評価および適応に関する
最近の研究動向

農研機構 農業環境研究部門
長谷川利拡

NARO

※ 農研機構のロゴマークには、国立研究開発法人 農研機構の名称と農研機構のロゴマークが記載されています。

気候変動に向けた
「流域内の洪水危険度見える化」の取り組み

国土技術政策総合研究所
河川研究部 水防災システム研究官

吉田 邦伸

3.各種イベント報告・講演資料等公開

令和5年度
地域の気候変動適応推進に向けた意見交換会

令和5年度 地域の気候変動適応推進に向けた意見交換会

開催日：2023年12月22（金）

各LCCACからの取組紹介資料を掲載

<https://adaptation-platform.nies.go.jp/archive/conference/2023/1222/index.html>



ゼロからはじめた情報収集・調査研究

静岡県環境衛生科学研究所 環境科学部
【静岡県気候変動適応センター】
神谷 貴文

茨城県県内市町村の適応計画
策定支援の取り組み事例

2023-12-22
茨城県地域気候変動適応センター
横木裕宗*・田村誠**

茨城大学
理工学研究科 都市システム工学領域 教授*
地球・地域環境共創機構 教授**

iLCCAC 茨城大学

令和5年度 地域の気候変動適応推進に向けた意見交換会

普及啓発に関する事例紹介

— かながわ気候変動学習教材の整備・展開を中心に—

神奈川県気候変動適応センター
(神奈川県 環境科学センター)
田澤 慧 主査

Kanagawa Prefectural Government

Future Designを通じた農業分野における
ステークホルダー連携の取組事例

2023年12月22日
令和5年度 地域の気候変動適応推進に向けた意見交換会
京都気候変動適応センター 外来研究員
一原 雅子

資料G

所沢市の気候変動適応の取組

茶畑 武蔵野樹林 狭山湖と狭山丘陵
どろろざわサクラタウン
所沢市の中心市街地 三富新田 とりのトロ

4. 生き物の分布推定ツール オープンSDM

- ▶限られた実際の生物分布情報から広域的な分布を推定したり、将来の分布変化を予測するために、近年では生物種分布モデル（Species Distribution Models、以下「SDM」）が生態学の分野で多用されています。
 - ▶今後、地方自治体や事業者がSDMによる解析を必要とする状況が想定されますが、高度な専門知識が必要であること、また、既存のツールや学習のための素材はほとんどが英語であることが人材育成の障壁となっています。
- ⇒SDM解析の手法を学習しながら、実際に解析することができる日本語ツール「オープンSDM」を開発

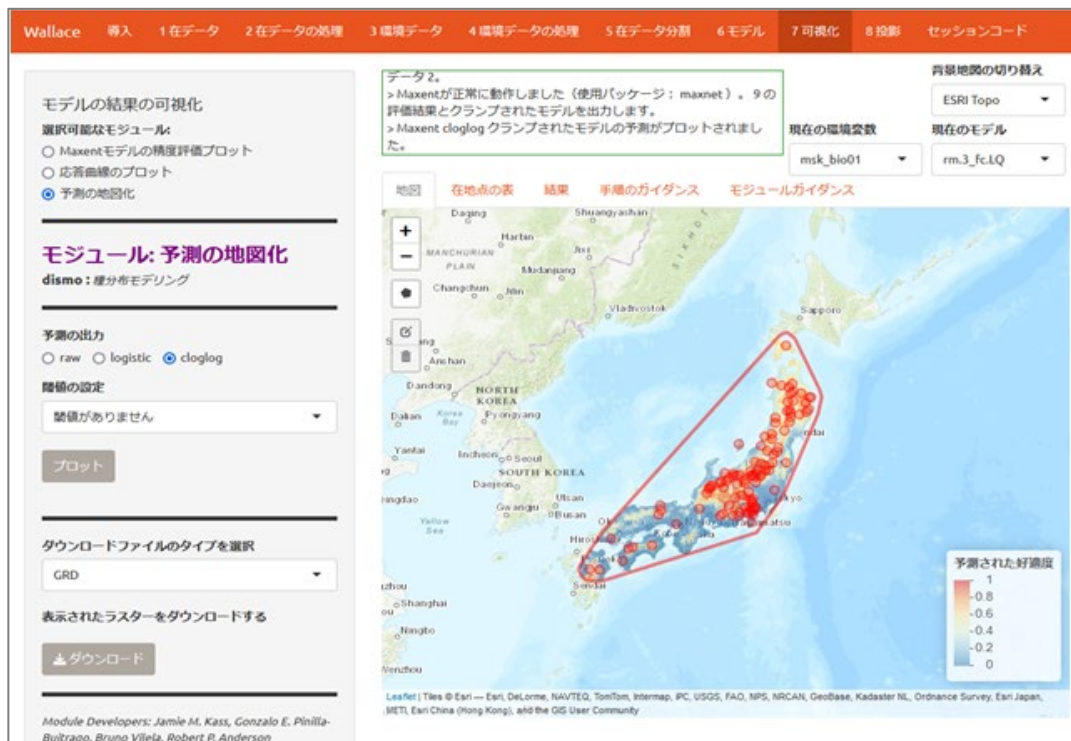


図1 「オープンSDM」の操作画面

データベースから生き物の分布情報や環境データをダウンロードし、SDMを構築して、分布予測やモデルの精度評価を行うところまで一貫して学習・操作できる。操作画面のほか、エラーメッセージやガイダンスなども日本語化されている。

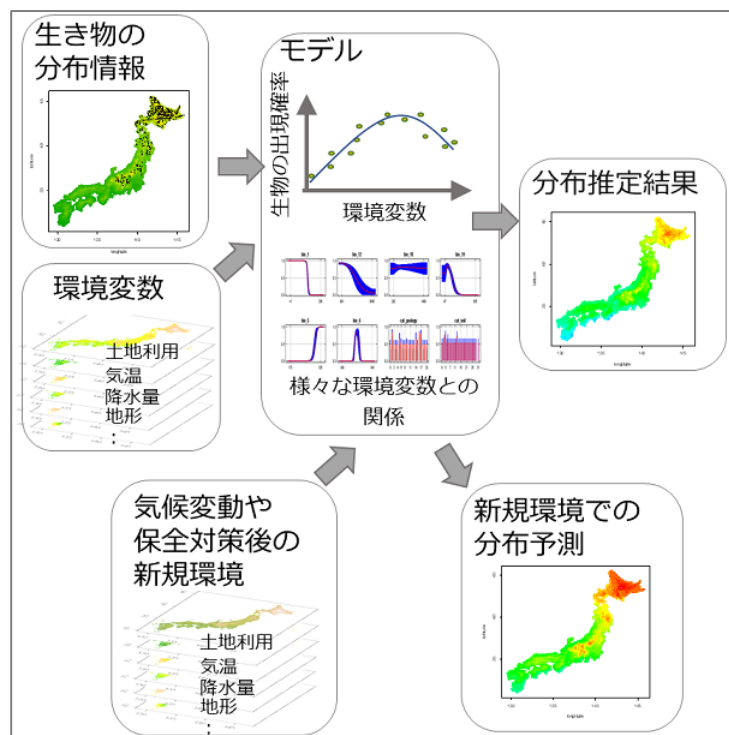


図2 生物種分布モデル（SDM）の概要
生き物の限られた分布情報と環境情報を組み合わせることで、広域的な分布や将来の分布予測をすることができる。